

いたのだろうか<sup>(72)</sup>。この時代に J = P・サルトル (J.-P. Sartre) が好んで読まれ、実存主義が流行したことは、おそらくこの運動に隠されたもうひとつの主題を読み解く鍵であると思われる<sup>(73)</sup>。〈自立した個人〉として生きる美德を聞かされながら育った彼らは、豊かさに邁進していく社会のなかで、実は〈生活世界〉のしがらみからはじめて自由になること、まさに自らの人生の主人公となりうる最初の人々でもあった。難解な哲学書や文学書を読みかじり、国家社会を熱っぽく論じ、そして自らを規定しようとする世間の壁に抗いながら、彼らは自立した“主体”として、ある種の「自己表現」さえ行っていた側面があったのである<sup>(74)</sup>。しかし彼らがそうした実存の微睡みに酔いしれることができたのは、古い世代の人々が、それを許容しうるだけの社会の度量を堅持し続けてきたからでもあった。「解放区」を夢見た彼らは、旧時代の〈生活世界〉を否定し、返す刀で勃興しつつある〈社会的装置〉をも否定していた。しかしその実、その気にさえなれば、その両方ともに帰れる場所があることを知っていたのである。

#### (4) 〈郊外〉の成立と〈旅人〉の定住化

続いて見ていく「第三期」は、高度消費社会の隆盛からバブルの崩壊、日本経済の全盛期と凋落までの期間 (1970年 - 1995年) である。それは「二五歳 = 一世代の例え」に即して言えば、2020年基準でおおよそ、読者の両親から祖父母らが読者の同年代として生きた時代に相当する。

その時代の外観は概ね次のようになるだろう。まずそれは、「第二期」後半から進められてきた資本制社会の「改良」が完成した時代であった。ゆきわたる豊かさ、充実していく社会保障のなかで、いつしか日本社会は「一億総中流」と呼ばれるようになっていた<sup>(75)</sup>。日本経済は「ドルショック<sup>(76)</sup>」および「オイルショック<sup>(77)</sup>」によって一次的な停滞をみたものの、その後は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とまで呼ばれた「経済大国」にまで登り詰めていくことになる<sup>(78)</sup>。ひとつの転機となったのは、日米貿易摩擦<sup>(79)</sup>が生んだ「プラザ合意<sup>(80)</sup>」であるだろう。ここでの急激な円高と“カネ余り”によって、日本社会

はますます狂騒的な消費社会へと変貌を遂げていくことになるからである<sup>(81)</sup>。しかしソ連の解体と冷戦の終結という歴史的イベントを経て<sup>(82)</sup>、世界が未だにその余韻に浸るなか、膨張しきったバブルはあっけなく崩壊する<sup>(83)</sup>。そして日本は、ここから「失われた20年」とも呼ばれる長期停滞の時代へと移行していくことになるのである。

思想史的な文脈から見れば、「第三期」は「繁栄と動揺の時代」であった。戦後の理想をめぐる理念闘争は廃れ、人々の関心は“豊かな社会”を生きる自らの生活へと移っていった。しかし“豊かさ”の謳歌だけでなく、それがもたらす矛盾や代償、あるいは病理や危うさといったものが問われてくるのもこの時代だったからである。

例えば激しい産業化や都市化の洪水のなかで、何か人間としての重要なものが失われつつあるのではないかという素朴な感覚は、早い段階から指摘されていたと言える。効率を求める過度な合理化や、それがもたらす人間的感性の衰え、関係性の希薄化など、一連の問題はしばしば大衆社会の病理<sup>(84)</sup>、あるいは総じて「人間疎外<sup>(85)</sup>」の問題と呼ばれていた。そしてそこに「疎外論」という理論的支柱を与えたのは、「マルクス＝レーニン主義」と決別し、人間論としてマルクスを読み替えた「第二次マルクス主義」であっただろう<sup>(86)</sup>。

この時代、“階級闘争”や“労働者の執権”といった論点に代わって、「かけがえない個人」や「自由な個性」が強調されるようになっていた<sup>(87)</sup>。なかでも“管理社会”や“全体主義”は、時代を問う論点として改めて主題化され、社会に潜む“権力”や“規律”がもたらす抑圧の問題が繰り返し論じられた<sup>(88)</sup>。ここで知識人らが訴えていたのは、人間的理想としての「自由な個性の全面的な展開」であり<sup>(89)</sup>、そうした個人が互いの自由の尊重のもと、新たな形の連帯を築いていくこと——それをわれわれは【第八章】で「自由な個性」と共同性の止揚と表現してきた——であっただろう。そしてこうした文脈のもと、不可視化された権力や規範、抑圧の構造を白日のもとに晒していくこと、さらには抑圧された人々を発見し、彼らの自由と権利を支援していくことこそが、人文科学の主要な実践となっていくのである<sup>(90)</sup>。

このことは、別の側面から言えば、「第二期」以来の〈自立した個人〉の理想

が、ますますわれわれの人間理解に骨肉化されていくことを意味していた。個の埋没として規定された日本文化は、ここで改めて欧米の「個人主義」に対立する「集団主義」として、あるいは「自由な個性」を圧殺するある種の全体主義として位置づけられることになる。そして「集団主義」の克服のためには、やはり内面的な成熟が不可欠であるとの、おなじみの批判が繰り返されることになるからである<sup>(91)</sup>。

「第三期」の後半になると、日本社会はモノにまみれた狂騒の時代へと突入していくことになる。そしてそこに現われたのは、「豊かな社会」に順応した新しい世代と、そうした世代に相応しい新しい思想であった。年長世代に“疎外状態”だと言われようとも、ただなんとなくそれを受け入れ、むしろ“ポップ”に、より“オシャレ”に私生活を満喫していく若者たちのことを、世間は「シラケ世代」とも「新人類」とも呼んだ<sup>(92)</sup>。そしてこの時代を代表する思想が「ポストモダン論」である<sup>(93)</sup>。この時代、文化人類学や精神分析が脚光を浴び、記号論を用いた消費社会の「差異化」の問題が盛んに論じられた。と同時に、「大きな物語」(grand récit)の終焉という標語のもと、理性や進歩、あるいはヒューマニズムさえも含む形で、従来の人間的理想の輝きが急速に失われていった。浅田彰は「シラケつつノリ、ノリつつシラケる<sup>(94)</sup>」と表現したが、それはまさしくこうした時代に相応しい、ひとつの知的態度であっただろう。人々を狂騒へと駆り立てていく巨大なシステムを前にして、もはや年長世代のように軽々しく革命などと口にはできない。一見退廃的で、嘲笑的であったとしても、自らはあの巨大な歯車から巧みに「逃走」しつつ、システムの周縁部分から群れなす人々に向かって繰り返し何かを訴えかけている。言ってみれば、それが新たな時代の「闘争」の形、「批判」の形だったのである<sup>(95)</sup>。

もっとも、こうした狂騒にすべての若者たちが順応できたわけではなかった。享楽する世間の片隅において、実際には少なくない人々がそこから脱落しつつあったからである。ちょうどこの頃、学校ではいじめが注目され、家庭では家庭内暴力が騒がれるようになっていた<sup>(96)</sup>。オカルトが流行し、自己啓発セミナーや新興宗教が話題をさらうのもこの時代である<sup>(97)</sup>。別の文脈から見れば、深刻化する環境問題が伝えられ、それが人々に世紀末的な不安を駆り立ててい

た<sup>(98)</sup>。この繁栄をきわめた文明そのものが、いまや人類自身の手によってまさに崩壊しつつあるのではないか——人々はそのように恐れ、また来たるべき時代のことを「心の時代」とも「環境の時代」とも呼んだ。自己超越を目指すトランスパーソナル心理学も<sup>(99)</sup>、人間中心主義の克服を目指すエコロジズムも<sup>(100)</sup>、いわばこうした時代の申し子だったのである。

こうして「繁栄と動揺の時代」の末期にあって、〈自立した個人〉の思想は大きく揺らいだ側面があった。それは一連の時代の変遷によって、その背後にあった理性や進歩の物語——社会は人間的理想に近づいているし、われわれにはそれを実現できる力があるとする素朴な信念——が信憑性を失っていったからである。それでも総じて見てみれば、この時代の知的風土は、必ずしも〈自立した個人〉の思想と対立するものではなかった。例えば「ポストモダン論」は、世の中が人々に要求するメジャーな存在、メジャーな生き方の枠組みを「脱構築」していったが、それは同時に、これまで抑圧されてきたマイナーな存在、マイナーな生き方を擁護するということを意味していた。先に触れた「心の問題」についても、その原因となるのは、概して人間それ自身を拘束するさまざまな制度や規範であると理解されていた<sup>(101)</sup>。つまり「かけがえのない個人」や「自由な個性」という文脈、そしてこうした「存在論的抑圧<sup>(102)</sup>」からの解放という文脈においては、「ポストモダン論」はむしろ〈自立した個人〉の思想に接近していく側面を持っていたのである。

さて、一連の時代を背景として、「第三期」における〈生活世界〉の実態とはいかなるものであったのだろうか。例えばこの時期になると、生活水準の向上によって、いまや多くの人々が百貨店、スキー場、そして海外旅行に大挙するまでになっていた<sup>(103)</sup>。加えてそれは、おそらく日本史上、最も社会的な格差が縮小した特異な時代でもあっただろう。しかしここで重要なことは、この「第三期」こそ、〈生活世界〉の構造転換が最も著しく進行した時代であったということである。

そのことを象徴しているのは、この時代に急速に拡大した〈郊外〉という空間だろう。ここでの〈郊外〉とは、人口増加が進む都市近郊に開発され、ベッドタウン、団地、ニュータウンとも呼ばれた新興住宅地のことを指している<sup>(104)</sup>。

この時代、男性はサラリーマンとなって企業に勤め、女性は専業主婦となって家事全般——ここには当然育児も介護も含まれる——を取り仕切るといった形が一般的化していく。そして〈郊外〉には、こうした新しい世代の夫婦たちが大挙して移り住むようになっていた。確かに現代のわれわれからすれば、そこでの性別役割分担はあまりに窮屈なものに見えるかもしれない。それでも当時の人々からすれば、そうした〈郊外〉の生活こそが、まさしく憧れの的であった。不便で汚く、融通の利かない隣人たちとの〈共同〉に縛られた“昔ながらの暮らし”を知る人々にとっては、〈郊外〉での暮らしは、便利で清潔、さらにはプライベートさえ確保されうる夢のような生活であった。それゆえ男性は学歴を積んで優良企業に勤めること、また女性はそうした優良企業に勤める男性と出会うこと、そして互いに恋愛結婚を経た後に、〈郊外〉でマイホームを獲得すること、それこそが人生の「黄金ルート」だと考えられていたのである<sup>(105)</sup>。

とはいえこうした〈郊外〉は、ひとつの地域社会のように見えて、その実、伝統的な地域社会とはまったく異質な空間でもあった。例えば別の見方をしてみよう。そこに広がっていたのは、群れをなす「企業戦士」たちのみならず、「経済大国」の主役となった、「カイシャ<sup>(106)</sup>」というシステムそのものを補完している「カゾク<sup>(107)</sup>」の姿である。「カゾク」は「カイシャ」を陰で支え、同時に「カイシャ」に全面的に依存している。そして〈郊外〉とは、そうした無数の「カゾク」が、その土地本来の文脈とは無関係に集住するという、まったく新しい社会的空間だったからである。伝統的な地域社会が、絶えざる隣人同士の〈共同〉によって支えられてきたのに対して、〈郊外〉においては、前述のように隣人同士の〈共同〉がそもそも想定されていない。それぞれの「カゾク」はあくまでそれぞれの「カイシャ」に紐付けされているのであって、最低限の“交流”はあっても、そこには〈共同〉の必然性、「〈共同〉のための事実」がそもそも成立しないのである。さらに言えば、その空間は公団や自治体、開発者らによって都合良くパッケージ化された、それ自体がひとつの商品でもあった。トレンドドラマを思わせる名称に、テーマパークのごとき整然さに包まれた造形、そこには〈生活者〉としての人間が幾世代もの時間を経て、その土地で〈生〉を紡ごうとして重ねてきた諸々の格闘の記憶、そして〈共同〉

の記憶というものが存在しない。それは言ってみれば、〈存在の連なり〉に決して根づくことのない、本質的に浮遊した空間だったのである<sup>(108)</sup>。

だからだろうか。こうした「豊かで文化的な暮らし」が実現していく影の部分で、前述した人心の荒廃が確かに進んでいるようにも見えた。見田宗介や大澤真幸は「虚構の時代」と表現したが、それは彼らが同時代に感じ取っていた漠然とした「嘘くささ」のことを強調してのことだろう<sup>(109)</sup>。すべてが満たされているように見えながら、生活それ自体のなかですべてが偽りに満ちたもののように思える感覚、あるいは華々しさの傍らで黴のごとく心に巣くっていく空虚な感情<sup>(110)</sup>。そうしたものが確かに人心を蝕みつつあるように見えたのである。

確かに「第三期」の後半にもなると、社会の狂騒はますます先鋭化しつつあった。高騰するジャパン・マネーを背景として、企業はホテルやゴルフ場に殺到し、サイパンからニューヨークに至るまでの海外資産を買いあさった<sup>(111)</sup>。都会では、高級ブランドに身を包んだ若者たちがディスコに集って踊り狂う<sup>(112)</sup>。テレビでは連日政治家の汚職問題が放送され、繁華街には財テクで大金を掴んだ「バブル紳士」たちが高級車で乗りつけている<sup>(113)</sup>。そのありさまは、まさしく「この世は金さ」を体現するものであっただろう<sup>(114)</sup>。

そうしたなかで、人々は「一億総中流」の時代にはまだ保持されていた、世間の素朴な一体感やモラルといったものが消失していくように感じていた。「豊かさ」が与えた自由の影で、人々はますます身勝手な“私人”になっていくように見えた。そこにあったのはひとつの“幻滅”であり、このことは〈郊外〉での暮らしについても同様であった。例えばあれほど憧れた生活のなかにも、人々は不倫や暴力、子どもたちの非行といった多くの苦い現実があるということをも嘔みしめていた<sup>(115)</sup>。先人たちが身を削りながら達成したはずの繁栄という夢、そして〈郊外〉に築かれるはずだった愛に溢れた家庭という夢、ここで人々が打ちのめされていたのは、それらがあまりに偶像化されていたからでもあったのである。

だが、それだけではなかっただろう。前述のように〈郊外〉に生きるということは、〈存在の連なり〉から浮遊した空間において、自らが必要とするあらゆる

る福祉を、隣人との〈共同〉によってではなく、〈社会的装置〉が提供する財やサービスによって実現していくことを意味していた。換言すれば、それはまさしく「〈ユーザー〉としての生」を生きるということの意味していたのである。【第五章】で見てきたように、「人間的〈生〉」の枠組みが「〈生活者〉としての生」から「〈ユーザー〉としての生」へと移行するとき、そこには「〈生〉の不可視化」や「〈生活世界〉の空洞化」が引き起こされる。そこでは根源的な〈生〉の実現様式が〈社会的装置〉への委託を媒介としたものとなり、〈生〉の現実は「経済活動」、「自己実現」、「学校教育」といった形で矮小化されていく。人間存在が「生きる」理由、それは原始より変わることなく「集団的〈生存〉」の実現——〈生存〉、〈現実存在〉、〈継承〉という三つの契機を伴った——であったことが、そこではわれわれに実感可能な意味という形では失われてしまう。この時代の「虚構」の感覚とは、おそらくこうした一連の要因が重なりあう形で人々に感受されたものだったのである。

ところで、こうした〈郊外〉に移り住んだのは、「第二期」で見てきたあの〈旅人〉たちであった。その文脈からすれば、「第三期」とは、前時代以来の〈旅人〉たちが「定住」していく時代であったとも言える。確かに彼らの多くもまた、存在の寄る辺となるべき〈故郷〉をその内面に携えていたのかもしれない。しかしそうした人々にとって、“昔ながらの暮らし”ほど嫌悪すべきものではなく、かといって夢や理想があるのだとすれば、それらはすべて“私生活”のなかにこそあった。だからこそ彼らは〈社会的装置〉の〈ユーザー〉となって、浮遊した〈郊外〉に「定住」していく。そしてある人々はレジャーと享楽に埋没していき、またある人々は、世紀末の〈隠者〉となった。世紀末の〈隠者〉たち——それは先に触れたように、騒然とした世相に“ノる”ことができず、享楽の波から脱落した人々のことを指している<sup>(116)</sup>。宮台真司が言うように、「終わりになき日常」と「さまよえる良心」こそが、こうした人々のひとつの心象風景だったのかもしれない<sup>(117)</sup>。そして深まる疎外状態と人心の荒廃、迫り来る世紀末的不安、こうした矛盾がひとつの頂点をなしたのが、おそらく「地下鉄サリン事件」だったのである<sup>(118)</sup>。

もっとも「第三期」に確立した「〈ユーザー〉としての生」は、ある部分にお

いてはきわめて不完全なものであった。というのも〈郊外〉の住人たちは、一方では確かに隣人たちとの〈共同〉から解放されてはいたものの、今度は「カイシャ」と「カゾク」という場が、「二四時間戦う」ことを余儀なくされる濃密な〈共同〉の場となっていたからである<sup>(119)</sup>。前述のように、彼らは「〈ユーザー〉としての生」の“お気楽さ”を知ってしまった最初の世代の人々であった。それでも彼らが「カイシャ」や「カゾク」といった場で、〈共同〉の負担に耐えることができたのはなぜだったのだろうか。おそらく「第三期」には、たとえすべてが「虚構」めいた出来レースのように思えたとしても、目の前の理不尽さに耐え、人並みに努力さえしていれば、いずれはすべてがなるようになるといった素朴な安心感が未だに残されていた<sup>(120)</sup>。言い方を換えれば、揺らぎ始めてはいたが、人々は自身が所属する人間社会を未だに信頼していたのであり、そこで接する身近な人々に対しても素朴な信頼を保っていた。それは【第八章】において、われわれが「集団的に共有された人間一般に対する〈信頼〉」、加えて「共有された意味に対する信頼」と呼んできたもの、長い年月をかけて人々が築き上げてきた、ひとつの消極的な〈信頼〉の形に他ならない<sup>(121)</sup>。〈郊外〉に移り住んだ最初の世代の人々は、確かに「〈共同〉のための事実」を失っていた。それでも彼らは後の世代に比べれば、おそらくはるかに〈共同〉のための潜在力を保持していたと言えるだろう。とりわけ彼らが幼少期に〈生活世界〉での〈共同〉を経験し、そこで図らずも「〈共同〉のための意味」や「〈共同〉のための技能」を培ってきたこと、それは彼らが成長して〈ユーザー〉となっても、〈共同〉を再開できる余地がはるかに大きいことを意味していたからである。

### (5) 「情報世界」の台頭と〈漂流人〉の出現

続いて見ていく「第四期」は、日本経済が低迷していくなかで、世界的な情報化とグローバル化が進展した期間(1995年-2010年)である。そしてそれは2020年基準で言えば、若年世代にとっては両親の時代、そして多くの人々にとっては自らの“過去”として記憶している時代でもあるだろう。